

## なぜ Frege/Wittgenstein の Before&After なのか

岡本 賢吾 (Kengo Okamoto)

東京都立大学

フレーゲについてもウィトゲンシュタインについても、その業績の評価については、次のような見方が広く受け入れられていると言ってよいだろう。

(1) まず、2人が確立した論理学上の仕事について考えるなら、i)一方で、本来の意味で「業績」と呼ぶに値するものとは、結局は、すでに広く理解された基礎的・常識的なものばかりである。すなわちフレーゲで言えば、そうした業績とは、古典論理（命題論理から二階論理あるいは二階算術まで）の形式体系、真理条件意味論（特に文結合子の意味の説明）といった、現代論理の文字通りの常識に属する道具立てに他ならず、さらにウィトゲンシュタインの場合、事情はもっと顕著であって、彼の確定的な論理的成果とは、ほぼ前期のみに限られ、しかも古典的真理表のようなまさに初等的なもの、あるいはもう少し完成度の要求を低めて言っても、オペレータ  $N$  のような、ある種の *infinitary* な論理結合子のアイデア程度である。ii)他方、もちろんその他にも、彼らは様々な論理学上の試みを遺してはいる。フレーゲでは、何と言っても、『算術の基本法則』の概念記法の体系（ある種のクラス理論）がそれであり、ウィトゲンシュタインでは、例えば、チャーチ以降のラムダ計算を先取りするかに見える数論の計算論的・操作的把握、また前期から中期に亙るものであるが、数学的帰納法についてのある種の有限主義的解釈、などがそうであろう。だが、フレーゲの概念記法の場合で言えば、現代から見て理解に苦しむような様々なエキセントリックな要素と、さらにとりわけ、そこに含まれる *fatal* な矛盾とのゆえに、その論理的価値についてはほとんど評価不能と言わざるをえないであろうし、また、ウィトゲンシュタインの操作的数論、帰納法の有限主義的解釈などの場合、あまりに萌芽的・断片的なマテリアルであって、著者の意図や目的さえ到底明確ではない。要するに、これらはいずれも、おそらく純然たる歴史的興味の対象とはなりえても、その根底に、未だ十分に理解されていないが、もしも適当な解釈が施されれば現代的な観点で見て十分高く評価できる成果にまで展開可能であるような、何らかの〈未活用の有効な資源〉といったものが含まれるといったことは、ほとんど期待しえない（敢えて試みてみても報われそうにない）。

(2) また、より哲学的な仕事（大まかに言って、論理の意味論的／認識論的／形而上学的な正当化に関わるような諸考察）について考えてみても、以上とかなりパラレルな状況が見られる。すなわち、i)一方でそこには、十分理解された、一定の典型的な哲学的ドクトリンが見出される。フレーゲで言えば、独立自存する非—知覚的で無時間的な対象としての数や命題（思想）といった考えに代表される、ある種のプラトニズム的实在論がそれであり、初期ウィトゲンシュタインで言えば、メタ言語的・形式的な（疑似）概念を含んだ言明の有意味性を徹底して排除する考え、また後期ウィトゲンシュタインで言えば、形式言語とそれに付帯する論理意味論的な考えに立脚した概念分析を徹底して拒否する考え（日常言語への

ある種の回帰)、等がそれである。もちろんこうしたドクトリンは、必ずしも広く支持されているとは限らないが、しかし十分に一定の哲学的立場としての市民権を得ており、多くの哲学者によって概念上の共通財産として遇されていると言ってよいだろう。ii)他方で、そうした「典型的ドクトリン」として取り出さる側面以外に、彼らの哲学的ディスコースのうちには、その真意が十分明らかでなく、ほとんど胡乱だと思われるようなマテリアルが豊富に遺されている。フレーゲで言えば、まず何よりも「文脈原理」の考え、さらに、「飽和した」存在者としての対象 vs. 「不飽和な」存在者としての関数、意義 vs. 意味、説明（定義） vs. 解明、束縛変項の有意味性 vs. 自由変項の無意味性、といった考えがその代表であり、ウィトゲンシュタインで言えば、「像」としての命題、内的関係 vs. 外的関係、言語ゲーム、規則のパラドクス、概念形成テーゼ、などについての所説がそれである。

幸いにしてと言うべきか、この(2)の ii)の分類に属する彼らの考えは、たとえどれほど真意不明で胡乱に見えようと、そこにほんの僅かでも解釈を持ち込む余地が認められれば、分け隔てなく考察対象にしようとする哲学者の性向のおかげで、盛んに取り上げられてはいる（この点では、(1)の ii) の場合とだいぶ事情が異なる）。とはいえ、そこではやはりテキスト解釈そのものが中心的関心事となっており、彼ら 2 人のこうした考察のうちに、適当な再構成が施されれば、現代論理学の尺度で見ても（あるいは、現代論理学そのものとは言わないまでも、現代論理学に十分キャッチアップできている論理哲学的な探究の尺度から見ても）十分評価できる成果にまで展開しうるような〈未活用の有効な資源〉を見出そうとする努力は、到底豊富に見出されるとは言えないであろう。

という次第で、本提題（と言うより、本ワークショップ）では、敢えて以上の(1)の ii)、および(2)の ii)に（あるいは、両者の間の連関に）着目して、そこに本当に〈未活用の有効資源〉が伏在していないのか否かを多少掘り下げて検討してみたい。そのためには、一方で現代論理学という **After** の側と、またカント哲学のような **Before** の側の双方から、いわば交差的な仕方で問題にアプローチを試みるのがおそらく有効であり、また不可欠であるように思われる。本ワークショップでは、角田が主に **After** から、また三上が主に **Before** から、以上の問題に取り組み、他方で岡本が、それら 2 人の提題の一般的な背景を説明する予定である。